

京鹿子

令和二年七月一日発行
通巻一五二号(毎月一回一日発行)



7月号

鈴鹿呂仁

拾掬集 その五十八



風も日も結び目に合はす袋掛
備中の空は懇ろ袋掛
牡丹見る程よき距離を保ちつつ
引算は家訓にあらず尺取虫
火点しの薄暑の街へ傾る群れ
列島の堪忍袋夏落葉

螢火の二つ三つ四つ検疫所
火取虫予見一つを疑はず

鴨川・木戸孝允邸吟行

新緑の風まんまるく孝允邸
木屋町に不穩分子の蜘蛛奔る
百態の達磨の邸やしき守宮鳴く
羅をゆるやかに着て京老舗
夏鴨の後顧の愁ひ堰猛る
新緑のひかりの中に子等遊ぶ

近詠

和田 照海



防人鼻

蛇穴を出でて濁世に舌赤き
燕反るクレインの運ぶ赤きもの
流木を磨きつくして大卯波
船泊ての防人鼻や父の日来る
一礁を沈めてしまふ鯉潮

近詠

松本 鷹根

苔に花

蹲踞に跳ねる旭や苔に花
花は葉に足腰延ばす花見台
悠揚に辿る眺望風薫る
水温む琵琶湖大橋徒歩で越す
子供の日国旗掲げて風を祝ぐ

—近 詠—

塩貝 朱千



心字池

桜満月青き地球の青きまま
山法師咲くしらじらと心字池
故郷は遠きこそ美し麦の秋
堰あれば川のとどろく若き夏
夕牡丹炎えて一途に燃えて老ゆ

英華採集

北窓を開けてこの世の鍵いくつ

大津 鈴木順子

いやはや、一読して面白い句である、と思ったのが第一印象。北窓を開けた途端に、この世がコロナウイルスというものに未曾有の危機に晒されていることを知った作者がこの問題を解決するためにどんな手がかり、即ち「鍵」があるのかを模索した、と解したい。さて、季語「北窓を開く」に冬の厳しさを乗り越え待望の春を自分の方に引き寄せる、という意味合いを持たせている、と考えれば人間が本来の春を取り戻すためにこの世に掛かっている錠前を外す鍵はいくつあるのだろうか？省略を効かして社会に警鐘を鳴らす一句である。

花吹雪青き地球への散華とす

京都 福田光代

コロナ疫病が全国、いや全世界に猛威を奮っている最中、この問題に真摯に向き合い句を成さんとすることは、大切な事である。日本人が最も好む桜も知らず知らずの内に散り始めている今、果してどれだけの人が今年桜を楽しむ事が出来たであろうか、と嘆く作者の心の内を吐露しているのが中七下五への措辞となつて表現されている。

花冷や満開にして山の黙

荒尾 荒尾かのこ

これもコロナを意識しての一句であろう。本来であれば、今年の桜も満開を迎えた今、人は桜を愛でながら思い思いに春を楽しんでいるところであるが、周りはひっそりとしていて桜の山も嘆き悲しんでいるかのように静かに黙っている。作者の心の中を「花冷」の季語が充分に伝えている。この三句のようにコロナを直接言わないで一句を成して記憶に残るものにしたものである。

神麓集

青 蛙 藤^故岡 紫 水

竹皮を脱ぎて正念取りもどす
父の日や父情といふも順送り
松の風松のみ知りて宵涼し
弥陀池に罪の数ほど青蛙
存問や水輪なさぬ息糸とんぼ

はたた神 沼田巴字

はたた神海を吊りあげ海圧し
はたた神宙にはじける怒りこそ
はたた神明治を語る柱疵
壮年や一途に好きな紅蜀葵
ゆつくりと始まる余生てんと虫

一 芸 丸井巴水

野風呂忌や吉野土産の長電話
一芸は無言に徹し散る桜
雲海の果てへ連山背鱗たて
煮凝りや祖父の涙目ふと浮かぶ
春落葉踏まれて土となる湿り

夏に入る 植村蘇星

何がため生きるか自問夏に入る
祖のありてこそその生活や花菜摘む
詩ごころありて視る聞く五月晴
風光る切れ字省略点と線
久に合ふゆかし友垣柿の花

神麓集

風みどり 北川孝子

風みどりどこまでも甘き自答など
いつ迄も空のあかるき梅雨あかね
夜の短かわが瞑想のはてしなく
乳足りし赤子の眠り梅雨穂草
ひとつ灯にひとりの暮し風かほる

たんぽぽ 直江裕子

春昼のこの大いなる気怠さよ
地を這へる日本たんぽぽ意地つぱり
春光に染まりきれずにみてひとり
花冷や新型コロナナ蔓延す
これといふ不満もなくて春愁

花明り 高木晶子

校門に半旗掲げて春未だ
春嵐別格となる白肌着
続々と天才となれ芽木の青
神鈴をばげしく鳴らし花鎮め
一人づつ命を惜しむ花明り

寂びの白山吹 伊藤希眸

鶴帰る湾の碧波うき立たせ
島に遅霜蝦夷の匂ひを含みみて
花の世へおくのほそみちまだ続く
そこここに祝ぎごと寂びの白山吹
野火走るコロナ大禍を焼き払はむ

神麓集

春キャベツ

奥田筆子

キッチンを明け渡しけり木瓜の花
春落葉加茂社のお告げ読みきれず
目を覚ますから悲しいの春キャベツ
木瓜の花火のいろに咲き予定なし
胸奥にダマ住みつきぬ山椒の芽

ナプキンリング

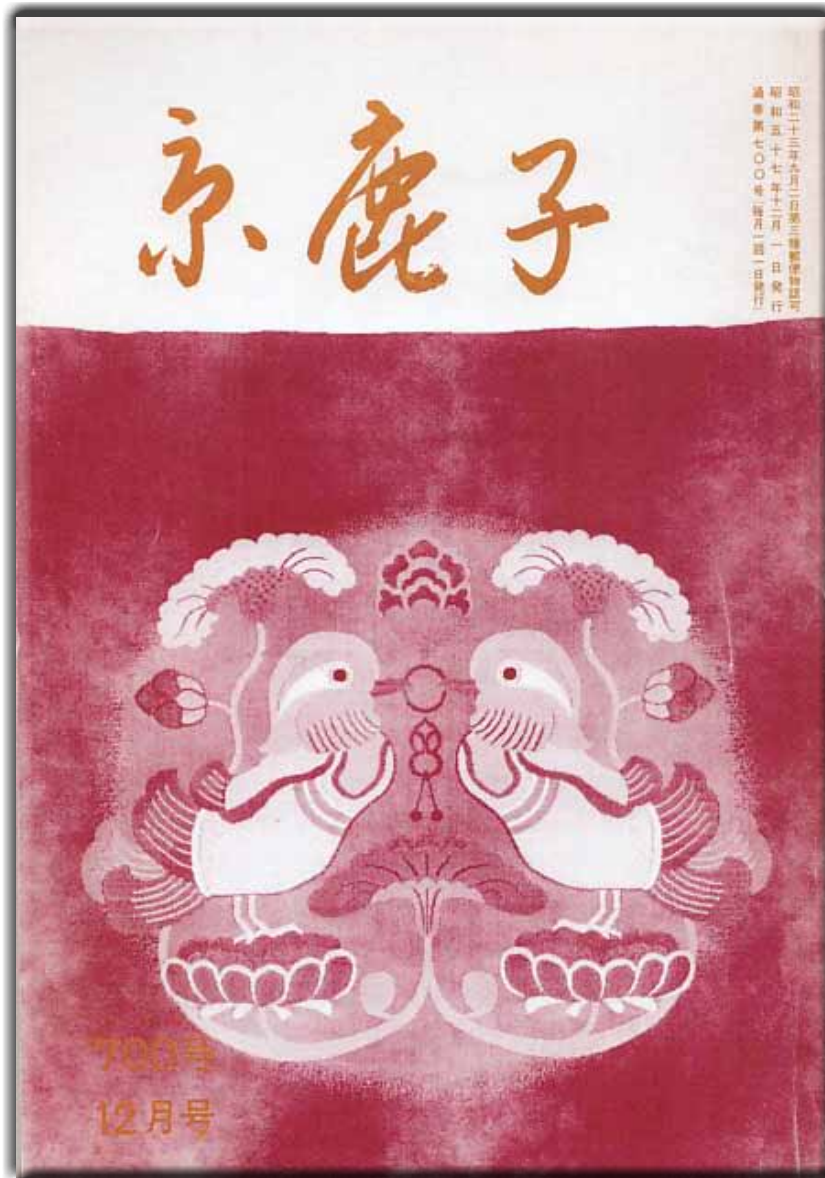
井上菜摘子

梅雨を来てフードコートの中も梅雨
ナプキンリングみもさを点しふたつ足す
ほうたるや飯島晴子の老いをふと
昼顔や待たれてゐないあかるさに
うんとうしろから快活な羽抜鶏

積木の家

村田あを衣

春の雷ひとつ足らざる積木の家
春うれひ帰点ずれぬるブーメラン
妹の歩幅へ合はすももさくら
さくら回廊身を軽くしてふた巡り
行き先の切符まちまち地虫出づ





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

京田辺 山中志津子

語部は飛鳥美人や蝶の舞
春嵐地球は操縦不能です

子雀を残し廢校開拓地

耕してむかし河原を美田とす

さくら貝ひとつ私の玉手箱

水仙忌嵯峨野つづきに訪ふ水尾

グーの手をひらけば桜貝一つ

おしゃべりは母の遺伝子雀の子

古草やいつもどこかに母のこゑ

山は郷愁海はあこがれ海道忌

潮鳴りは遠き日のままさくら貝

あかあかと野火片なびく裾野風

はつ蝶は俳枕への扉とも

囀りや目から鱗の落ちるまで

はなれみるだきしめてみるさくらの夜

過客なる春雷ありてこそ故郷

あらためて襟を正して卒業歌

密やかに私語交しをり夜の蜩

逃水追ふ詮無きことと知りながら

惜春やわが影をつれ戻り橋

城陽 鷺山 珀眉

福山 亀井 福恵

古草の黙の見守り風ふふむ

悠久や城ふくらます鶯笛

雪柳ひらがな文字の一行詩

黄蝶の急いで走る昼休み

現し世はさくらさくらや古戦場

早春や思案半ばの水のこゑ

風澄んで社をつつむ濃山吹

寒明けやあけぼの色のたまご焼き

戯れの風と浮雲花菜畠

夕ざくら堀のすみずみむらさきに

ゆく雁や無辺の光やがて消え

空耳の帰雁のこゑや宙の黙

チューリップ並んで進む新入隊

さくらさくら風に任せばちりぬるを

春の夢齡わすれる艶やかさ

百歳の句の道照らす水仙忌

目瞑りて遠き街騒沈丁花

公達の木沓の音や白木蓮

木屋町の昼行灯や春しくれ

山吹の黄の迫りくる水の音

福知山 西村 白枿

京都 菊池 和子

高槻 安田 優歌

大阪 本郷 公子

北窓を開けてこの世の鍵いくつ

古草を踏むや余生を問はれぬる

子雀と同じ日を浴び試歩進む

夜ざくらの吐息の中や海道忌

花吹雪青き地球への散華とす

豊饒と我を射るごと紫木蓮

幼な児の鳩追ふしぐさ花の昼

片隅の舗装のすみれいとをかし

花冷や満開にして山の黙

啓蟄や人はコロナに蟄りたる

誰も来ぬ苑や桜の震へをり

籠城の腹を括りぬさくら餅

石楠花の香に導かれ朝の塔

あめんぼう水面という小宇宙

泰山木守る公園の南側

焦ることも滞りもなく山笑ふ

大津 鈴木 順子

京都 福田 光代

荒尾 荒尾かのこ

アソナ 伊吹 之博

